



そして、ジェネレーター（発電機）設置のおかげで現在、スタッフハウスと校舎と舞台（朝礼台のようなもの）に電気がつくようになりました。電線さえあれば村中に電気を供給することが出来る程のもので、まだ電線を買うお金のメドもついていないのに、もう村人達は「今から準備する」と、電柱を一本ずつ立てているとのことでした。日本では“収入のない生活”を想像するのが難しいと思いますが、農作物を売るのに3時間も4時間もかけて売りに行く、という厳しい生活の中で、まだ売れるものがある人はいいけれど、その日食べるものにも事欠くような生活をしている人が大勢いるのに、まだいつ買えるのかわからない電線のための電柱を立て始めている…ということに、ただただ「すごい…」と感心するばかりでした。

マニラから駆けつけたビトイ神父さんによって、翌日（10月22日）ミサと祝別式が行われました。ビラーン独自のセレモニー — 皆がある大きな木のまわりに集まり、3人の女性が高い声で歌をうたうというもの — もありました。ランチは、村人達と全員で校舎を眺めつつ食べ、午後は雨が降ったり止んだりする中、子供達のビラーンダンスやゲームなどのプログラムがありました。私もHANDSの代表（?!）ということで、挨拶と歌をうたわされ、楽しい時間を過ごしました。

その翌日は、山を下りてサムラングへ。ウォーターシステム（簡易水道）も完成していて、校舎もブロック作りの立派なものでビックリ。ブロックは400個以上使用しているのですが、買うと高くつくので（1個約30円）村人達が手作りしたと聞いてまたまたビックリ！ただ“援助してもらおう”のではなく、自分達も苦勞し、努力して手に入れているのを見ると、私達の援助が本当に『活着ている』と嬉しく思えます。

クリニックにて村人みんなでランチを食べたあと、アトウモロックと同じようにミサ・祝別式があり、私は生まれて初めてテープカットをさせて頂く幸運に恵まれました。また、子供達のダンスや村人達の歌、神父さん達の挨拶などがあって、サムラングの地をあとにしました。

日本の整いすぎた生活の中にいると、ビラーン族などの山奥での生活は、想像する事が難しいように思えます。私もチボリ族の地に住み始めて1年と3ヶ月が過ぎましたが、“生活すること自体にとっても時間とエネルギーがかかって、不便な所というのはこういうことなのか…と日々実感しているところです。『自然と共に生きる』ということは、また違ったエネルギーを必要とすることでもあるということがわかり、私達もビラーン族の生き方を知っていく中で、日本での生活を見直していくことが必要なのではないか、と感じています。いつか会員の皆様がビラーンの地を訪れることが出来ますよう、心から願っております。

## ∞ 「アイヌ民族の権利運動と政治問題」トークに参加しました ∞

1週間ほど前に、ラテンアメリカ協力ネットワーク（レコム）の関係者から、「先住民族支援の中で政治とどう向き合うか」をテーマとした勉強会の案内をいただき、この14日神田神保町での集まりに参加しました。講師の上村さんは国連を舞台にした先住民族の権利討議の場で活躍されている方であり、私も2年ほど前、上村さんの著書によって初めて、ビラーン族などミンダナオの少数民族が単なる文化的少数派というだけでなく、先住者としての権利（先祖伝来の土地主張など）を主張できる先住民族という捉え方をすべきことを知りました。

アイヌ民族は昨年、二風谷ダム判決で先住民族としての主張が認められ、「アイヌ文化振興法」の制定で、独自の文化を持つ民族として認められました。それはアイヌ民族組織である北海道ウタリ協会が、明治時代に制定された北海道土人保護法に代わるアイヌ新法案を1984年